

龍谷大学留学生別科における 日本語教育の改革の取り組みについて

北 川 逸 子
KITAGAWA Itsuko

キーワード

〔留学生別科（JCLP）〕 Japanese Culture and Language Program

〔JAS〕 Japanese and Asian Studies ・ 〔龍谷大学第5次長期計画〕 RYUKOKU Vision 2020

〔留学生30万人計画〕 Plan to accept 300000 International Students

1. はじめに

2009年、龍谷大学第5次長期計画が発表された。それによると、2020年までに「教育の国際化の推進」がうたわれている。その内容は、「グローバル化が進む中で本学の存在意義を一層発揮するために、共生の理念を備え、国際社会で活躍できる人間を育成する取り組みを強める。そのため、国際化戦略を再構築し、アジアを重点地域としつつも多様な国と地域から留学生をさらに受け入れる具体的な方策の検討と体制構築を進め、活発な学生交流が展開される多文化共生キャンパスを全キャンパスで実現する。くわえて、本学学生の留学機会を拡充するため、海外留学制度や海外拠点（米国・パークレー）の充実を積極的に検討する。また、留学生を含む、海外に在住する卒業生のネットワークを構築し、教育の国際化を支援する体制も強化する」となっている。現在までにBIE Programなど各種の日本人学生の留学制度が整備されてきており、学生交換協定及び学術研究・教育研究協定の締結大学も年々増えつつある。大学の国際化のプログラムが実際にどのように進めていくかは今後徐々に肉づけがなされるものと期待している。

受け入れ機関の一つである留学生別科（Japanese Culture and Language Program）は別科生と交換留学生（受入）をその教育の対象としており、別科の存在意義は、ひとつは学部教育への優秀な人材の教育、もう一つは、大学の国際交流を担って、適切な日本語教育および関連科目の教育を実施することである。当然のことであろうが、留学生別科も上記の第5次長期計画の中での再構築が必要とされよう。

留学生別科は年々その規模を拡大し、2008年度後期には在籍学生数が100名を超した。ところが、その実際の数字は、過去の国際センター研究年報のどこを見ても書かれていない。別科生の受入数と交換生の受入数の欄の数字を足してはじめて、留学生別科で何人が教育を受けているかが分かる。また、「留学生別科授業・講義 受講状況」には各講義の担当者名や受講者数などが書かれているが、それがどのような構成で実施されているのかは書かれていない。

これでは統計資料としては有用でも、留学生別科でどのような教育がおこなわれているかは分かりにくいと思ったのが、本稿を書き始めた動機であり、これを明らかにするとともに、別

科の今日までの変遷および抱える問題点と将来展望について述べたい。

2. 留学生別科の体制

留学生別科のクラス構成は以下のような変遷を得て、現在の構成となっている。

～2005年度後期	5クラス体制
2006年度前期～2008年度前期	6クラス体制
2008年度後期～2009年度後期	7クラス体制

クラス数の増加はひとえに学生数の増加のためである。ほぼ2年程度でクラスの数を増やす結果となっているが、その背景は何であろうか。

2-1. 入学者数の変遷

まず、別科入学者の変遷を見てみたい。2009年度後期が特に突出して多い以外はほぼ20名前後で推移している。

〈表1〉

留学生別科入学者数推移

(国際センター研究年報第18号より)

西暦	2003		2004		2005		2006		2007		2008		2009	
入学学期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
入学者数	20	18	14	16	13	17	11	17	10	19	11	22	9	31

一方、交換留学制度に基づく留学生（受入）の数はどのように変遷したであろうか。

〈表2〉

交換留学生受入数推移

西暦	2003		2004		2005		2006		2007		2008		2009	
入学学期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
入学者数	16	17	12	26	17	25	15	34	25	41	23	37	23	45

学生交換協定校は18カ国、38校に増加し、毎年のように協定校が増えている。また、交換留学生数も、それに応じて、増加傾向にある。一つ注目すべき点は、前期と後期の人数の違いであろう。海外の大学の学期が6月に終わる場合が多いことから、自然と留学時期が9月になることが多いためである。この人数の差は毎年繰り返して起きている。

上に挙げた2種類の学生が留学生別科という一つの機関とともに学習する体制をとっている。その長所と短所については、別途4-2の項目で述べたい。

以上、各学期の入学者数をみてきたが、在籍年数は学生によって異なる。半年で修了する学

生はごく少数で、多くが1年、別科生の場合は1年半在籍することがある。そのため、留学生別科の学生数の実態は、在学生の数を勘定に入れなければつかめないことになる。

2-2. クラス構成の実際

直近の09年度前期および後期の構成を見てみよう。二つの表を見ると、前期と後期の学生数が非常に違うことが分かる。また、クラスがどのように構成されているかもお分かりいただけると思う。また、指導レベルの関係上、2クラスは少ない人数で抑えられているが、そのほかのクラスでは学生数は12～20名前後となっている。理想を言えば、質の良い教育を実施するためには15名以下で抑えたいところだが、実際には、毎学期、人数間の調整が難しい。また、特に後期にはクラスの人数増によって教員に負担が重くのしかかってきている。

〈表3〉

09年度前期・別科クラス構成

北川作成

クラス	別科生		交換生		クラス計
	在学生	新入生	在学生	新入生	
2	1	2	0	1	4
3 A, 3 B	4	2	2	8	16
4 A, 4 B	9	3	8	2	22
5	4	2	6	7	19
6	2	0	13	0	15
J A S			6	3	9
大学院				2	2
計	20	9	35	23	87

09年度後期・別科クラス構成

クラス	別科生		交換生		クラス計
	在学生	新入生	在学生	新入生	
2	0	1	0	5	6
3 A, 3 B	2	12	0	15	29
4 A, 4 B	7	11	5	7	30
5	7	4	2	8	21
6	5	3	7	4	19
J A S			1	6	7
大学院			2		2
計	21	31	17	45	114

2-3. クラス構成のコンセプト

まず、クラスの数七つであるが、クラスレベルの設定は大まかに言って次のようになっている。近年、別科生よりも交換留学生のほうが人数が勝っていることから、2クラス～4 Aクラスにおいては、交換留学生を主なメンバーとするシラバスが採用されている。

2クラス…初級後半

3 A、3 Bクラス…中級前期（二つのクラスは大体同レベル）

4 Aクラス…中級後期・交換留学生を主なメンバーとする

4 Bクラス…中級後期・別科生をメンバーとする（進学準備コース）

5クラス…上級前期（主として進学準備コース）

6クラス…上級後期（主として進学準備コース）

なぜ「1クラス」というクラスがないのかというと、2007年度後期までは存在していたが、入国管理局の入国審査基準が変更になったためである。別科側の事情としても、1クラス（初級のはじめから）レベルの別科生を受け入れると、1年ないしは1年半の在籍期間に目標とする大学・大学院入学を果たすレベルの日本語力に引き上げるのは不可能である。また、国際文化学部がJASが開設され、交換留学生対象の初級日本語講座が設けられたことも1クラス廃止の理由の一つである。

学期によっては、低い日本語力の別科生が入学してくることもあるが、その場合は特別講義（日本語基礎）を開設することによって対処している。また、交換留学生で2クラスレベル以下の学生が入学した場合は、JASにご協力願うという方法でしのいでいる。

3 A、3 B、4 A、4 Bという中級前半および後半のクラスが設けられているのにも理由がある。海外の日本語教育機関の日本語教育のレベルが向上するにしたがって、学生の日本語力も飛躍的に向上し、多くの学生は1、2年生のうちに初級レベルを修めたいと日本へ留学してくる。その結果、中級レベルの需要が高まっている。そのため、07年度前期には3クラスを三つ、08年度前期から3クラスを二つ設け、さらに、08年度後期からは4クラスを2種類設けた。一つは交換留学生対象の4 Aクラス、もう一つは別科生対象の4 Bクラスである。

なぜ対象が異なるクラスを設けたかという理由は、中級前期まではどの学生も共通に知らなければならぬ日本語のレベルと考えられるが、それ以降は目的別に指導しなければならぬ段階に至る。交換留学生は日本体験および日本語のアカデミックな運用力向上を目的としているが、別科生の多くは大学・大学院入学を目的としている。中級後期の段階でそれぞれの目的に合った教育を施さないと、目的が果たせないばかりか、学生に不満を感じさせることになりかねないためである。

5、6クラスに関しては上級に達している上、交換留学生は学部の授業に参加することが認められているため、別科の授業は自分が必要だと考える科目のみを履修し、そのほかの時間は学部の授業に参加している。そのため、クラスの人数は20名を超えているが、実際に授業に参加する学生数はその数字より少なくなっている。詳しい数字は、国際センター年報の「留学生別科授業・講義 受講状況」を参照されたい。

2-4. 留学生別科における科目と指導方式

別科においては、以下のような2種類の科目群が設定されている。

(1) 必修科目（日本語関係科目）

2～4 Bクラス…コア8コマ+技能別必修科目4コマ

5～6クラス…12コマ

(2) 選択必修科目

①各学部からの日本事情関係科目…基礎的な専門科目の講義

②別科独自の文化科目…「武道・芸道」

③特別講義…「囲碁」、「Buddhism」、

日本文化入門1、2、

日本語能力試験対応1級、2級、3級講座

日本語の教育方法については、2クラス～4クラスまでは、交換留学生を主な対象とした授業内容でコーディネーターと担当教員が協力して一つのプログラムを遂行していくティーム・ティーチング方式をとっているが、5、6クラスについては、コーディネーターの統括のもと、各担当教員が一つの科目を責任を持って実施していく方式をとっている。これは、初・中級段階では一貫した内容の教育方法のほうが学生にとってわかりやすいこと、逆に、上級段階では、一つ一つの技能を重視する方式が定着がよいためと、科目ごとに授業内容も担当教員も変わる学部の方式に近い授業を提供し慣れさせるためでもある。

なお、2～4クラスレベルでは、ティーム・ティーチングの時間以外に、技能別（聴解、漢字、話し方、読解）の必修科目が設けられており、各学生は各技能の自分の力に応じて5つのレベルのクラスが選択できるようになっている。これは、05年度の11月から3月にかけて、当時のセンター長（河村経済学部教授）の提唱のもと、専任教員2名、特任教員1名、非常勤講師3名をメンバーとする6名の別科改革タスクフォースで検討された結果をもとに設けられた制度であり、学生にはコアクラスの別をこえて自分の能力に合ったレベルの選択を認めていることから、好評である。内容も各担当教師の尽力により、年々充実してきている。

そのほかに、選択必修科目として3種類の講座が開設されている。まず、日本事情関連科目があり、各学部から講師を得て、基礎的な専門知識を学ぶ機会が保障されている。次に「日本文化入門1、2」で、学生たちからの日本文化について知りたいという要望が多いため、レベル別に2講座用意されている。文化科目としては、特別講義の「武道・芸道」、「囲碁」、「Buddhism」もある。第3は、日本語能力試験を受験したいという学生の要望が別科生・交換生の別を問わず多いため、1級、2級、3級対応の講座をそれぞれ開設している。いずれも多くの学生が履修し、好評を得ている。

交換留学生に対しての特別な支援としては、アカデミック・アドバイザー制度があり、学業上の相談などを受けていただいている。

以上、別科の体制を述べたが、2005年以降の時系列的な変遷については、以下を参照されたい。

〈表4〉

別科の歩み年表（2005～2009）

時 期	事 項
2005年 6 月	別科創立20周年記念シンポジウム
2005年11月～2006年 3 月	別科改革タスクフォース
2006年前期	6 クラス制に
	1～3 クラスに技能別必修科目（聴解、話し方、漢字、読解）を開設
	「日本文化入門1」を開設
2007年前期	4 クラスのシラバスを変更し、ティーム・ティーチング方式に変更
	「日本語能力試験対応講座」を開設
2007年後期	非常勤講師 3 名をコーディネーターに起用
2008年度前期	「日本語能力試験 1, 2 級対応講座」を開設
2008年度後期	7 クラス制に。4 クラスレベルに 4 A クラス、4 B クラスを設定
	非常勤講師 4 名をコーディネーターに起用
2009年度前期	「日本文化入門2」「日本語能力試験 1 級対応講座」を開設
2009年度後期	「日本語能力試験 3 級対応講座」を開設

むろん現在の体制が万全であるとは言えず、多くの問題を抱えている。

紆余曲折を経、改善を重ねてきた現在の別科の体制を一覧表にして以下に示す。

〈表5〉

09年度後期体制

北川作成

タイプ		交換型				進学型			
クラス		2クラス	3 Aクラス	3 Bクラス	4 Aクラス	4 Bクラス	5クラス	6クラス	
コーディネーター		吉田	稲見	森田	三登	北川	田尻	田尻	
クラスの概況	レベル	初中級	中級前期		中級後期		上級 1	上級 2	
	適正人数	10名以内	15名以内	15名以内	15名以内	15名以内	15名以内	15名以内	
	主な対象	交換留学生中心	交換留学生中心	交換留学生中心	交換留学生中心	別科生中心	別科生・交換生	別科生・交換生	
	必修授業時間	12単位							
	コア	8 講時（ティーム・ティーチング）					技能別	技能別	
技能別必修科目	4 講時（4科目）								
コアの方針	シラバス	トピックシラバス 言語機能重視	トピックシラバス 言語運用能力重視	トピックシラバス 言語運用能力重視	トピックシラバス 自己学習能力重視	トピックシラバス 中級 4 技能向上	進学目的		
							技能別授業		
	主教材	J-Bridge II 日本語集中 トレーニング	自主制作教材	自主制作教材	生きた素材 で学ぶ中級 から上級へ の日本語、 日本への招 待	文化中級日 本語Ⅱ、ニ ューアプロ ーチ日本語 応用編	各教科担当者が決定		
	特徴	言語活動中心	能動的な学習活動の実 施 日本人学生との交流		アカデミッ ク・スキル の養成	中級後期の 段階での基 礎力養成を 重視	（話す能力、 論理的な表 現能力、文 法、聴解、 文章表現、 作文、速読、 I T 能力）	（作文、デ ィベート、 速読、論理 的な表現能 力、聴解、 読解、IT 能 力）	
技能別必修科目	漢字	5 レベルの授業を設定、力に応じて選択					（話す能力、 論理的な表 現能力、文 法、聴解、 文章表現、 作文、速読、 I T 能力）	（作文、デ ィベート、 速読、論理 的な表現能 力、聴解、 読解、IT 能 力）	
	聴解	5 レベルの授業を設定、力に応じて選択							
	読解	5 レベルの授業を設定、力に応じて選択							
	話し方	5 レベルの授業を設定、力に応じて選択							
コンピュータ・リテラシー		学期開始オリエンテーションで 3 講時分合同で通訳つきでエチケット＋ワードの基本のみ導入							
		コアに従って必要な技能を導入する					カリキュラムに従って入れる		
特別講義ほか	特別講義（基礎）	該当者のみ受講可	不可						
	日本文化入門 1, 2	原則として 2, 3 クラスは入門 1、4 クラス以上は 2 を受講する						個別対応	
	日能試 1 級講座	不可			可				
	日能試 2 級講座	不可	可						
	日能試 3 級講座	可					不可		
	一般事情科目受講	日本語力によって判断	可						
特別の対応	別科生への対応	特別講義 1 講時	個別対応	個別対応		進学指導	進学指導		
	交換生への対応	なし			交換生は学部授業履修許可				

3. 別科生の入学プロセスと進学支援について

ここで、別科生の存在について若干述べたい。

3-1. 入学のプロセス

留学生別科に志願してくる別科生の目的および志願・入学許可の背景についてこれらの学生たちは私費で日本の大学ないしは大学院入学を目的として志願してくる。国際センター年報の資料によると、入学者の出身国・地域は中国、台湾が多く、それぞれ全体の62%、7%を占める。そのほかの多くの国からも志願者は多い。しかし、実際に入学許可が得られるのは、約4分の1程度である。

その差の理由は二つある。ひとつは、入学書類審査である。現在までのところ、特例を除き、入学試験は行われていない。それに代わり、綿密な入学書類審査が行われ、ここで日本語力が基準に達しているかどうかなど、厳しくチェックされ、約3分の1の者が残る。

第二の理由は入国管理局による入国審査である。経費支弁状況や志望理由について厳しい審査が行われ、これを通してはじめて入学が認められる。入国審査については、入国管理局の方針がかなり頻繁に代わり、2008年度の福田元首相が提唱した「留学生30万人計画」によりビザの種類や審査が大幅に緩和された。2009年度後期の入学者数の増加はこのような背景に基づく。

入学後、別科生たちは自分たちの目的を果たすため、インテンシブな日本語教育を受けることになる。1年ないしは1年半後に大学・大学院・専門学校や就職など、それぞれの道へと巣立っていく。

彼らの生活は一般的に言って経済的に楽ではない。日本と彼らの出身国の貨幣価値の差がその主な理由であり、アルバイトなしに学業に専念できる学生はわずかである。学業に支障をきたすこともまま見られる。

3-2. 進学支援体制と提案

進学支援体制について次に述べる。

08年度からは進学相談制度を設けており、専任教員が相談に当たることになっている。学期初めに説明会を開き、初級・中級のクラスの学生も早い段階から進学準備を進められるように、情報を与えている。進学に至るまでは長い年月がかかることから、勉強指導の面でも情報の面でも精神的な面でも手厚いケアが必要であり、担当する教員には重責が課せられている。

進学状況をみると、本学各学部および大学院への進学が多いが、それは学部については、各学部が別科生（4クラス以上）に対して推薦入学制度を設けていくためである。しかし、推薦枠に入るのは容易ではなく、成績はトップクラス、出席も100%前後で、学部進学後も優秀な成績を修められる見込みのある学生しか推薦されない。枠があっても、推薦できるレベルに達しない場合には学部に戻上することになっている。この制度が充実してきたおかげで、多くの別科生が学習意欲を向上させ、大学進学の実を果たしている。

最近の傾向としては、大学院への進学希望が大幅に増えていることである。母国の大学で専

攻科目および日本語の教育を受け、日本の大学院でさらに高度の教育を受けたいという人が多い。その背景には、中国の場合、大学生の就職難の問題がある。

このような学生に対して、現在のところ、4クラス以上の交換留学生には学部の授業に参加することが許されているが、別科生には門戸が開かれていない。そこで、切に提議したいのは、4クラス以上の別科生で大学院志望者に対して、学部の授業を聴講することを可能にしていきたいということである。実現するならば、大学院志望者にとっては大きな支援となろう。

しかし、なかには、母国の大学での専攻と全く違う研究科へ進みたいという学生がおり、これらの学生には研究希望分野の基礎知識を別科で自習させることにしているが、いかに日本語力が高くてもわずかな専門分野では大学院進学を果たすことは至難の業であり、仮に入学できたとしてもその後の研究に困難が予想されることから、進学指導に頭を悩ませている。

4. 留学生別科の抱える問題点と改善提案

現在の体制の問題点はいくつか挙げられる。それぞれについて説明するとともに、改善を提案したい。

- 4-1. 別科生入学審査のありかた
- 4-2. クラス内に別科生と交換留学生が混在することについての功罪と改善提案
- 4-3. クラス分けプレースメントテストのありかたと改善提案
- 4-4. コーディネーター制度のありかた
- 4-5. 別科教員の労働量
- 4-6. 選択必修科目のありかた

4-1. 別科生入学審査のありかたと改善提案…現地選考試験の実施

この点については別科常任委員会で何度も議論が戦わされたが、現在のところ、入学試験を行わず、書類審査によって選考が行われている。それに加えて、志望理由などの録音を送付することが義務付けられ、さらに、国際部員によって国際電話による日本語力の簡単なチェックも行われている。そのうえで、入試小委員会などにより選考が行われるのであるが、事前の作業のために国際部員には多大の負担がかかっている。しかし、実際に本人に面談をする機会はないため、どのような厳しい審査を行ってもどうしても不適切な志願者の入学を防ぎきれない。

これを防止するには、入学試験を実施することが一番いいと考えられるが、世界中から志願者がいる現状で、どこで入学試験を実施するのか、試験を受けられない志願者に対してどうやって公平性を維持するのか、答えが見つからないことに変わりがない。

解決策のひとつは志願者が多い中国、台湾などで会場を設け、入学試験を実施することだろう。しかし、広い中国のどこで？という問題がある。仮に北京で試験を実施するなら、辺境地域の学生には長時間の旅行を強いることになり、結局一部の志願者のみが対象となるであろう。それでも、現地での選考試験は、対外的にも有益な点が多く、早急に実施が望まれる。

解決策の二つ目は、優良な志願者を多く擁する対象校をいくつか選定し、本学教員が出向い

て入学試験を実施することであり、すでに2006年から河北大学の付属校に対してはこの方式を実施している。しかし、対象校の選定はそれ以降進んでいない。

ただ以上2点の解決策はある程度有益と考えられる。しかし、費用対効果の面からの検討が必要である。また、スカイプ（Webを利用した画像付き双方向通信）の利用も考えられるが、機材が必要なこと、情報の漏えいなどの問題があり、実現は慎重に検討すべきである。

そのほかの国からの志願者については、入学試験は実施不可能であり、現在の書類選考方式を続けるしか方法は見つからない。

しかし、グローバル化が進展する現在、留学生獲得は激化が予想されることから、現在の方法より一歩進んだ方法を早急に検討しなければならない。

4-2. クラス内に別科生と交換留学生在が混在することについての功罪と改善提案…上級交換留學生用プログラム

留学生別科には別科生と交換留學生という別々の目的を持った学生が存在するが、4 A、4 Bクラス以外のクラスではこれらの学生たちが混在して学習している。

良い点は、留学生別科という場所でお互いの出身を越えて相互理解が深まることである。自分の国の考え方だけでなく、多文化に触れられることは、若者にとって最上の経験となる。コミュニケーション上の媒介言語は英語または日本語が使われており、目標言語である日本語を実際に使用する機会となっている。これはとくに、2～3クラスレベルで現実にもみられる。

短所と言えるのは、おもに上級クラスにおいて目的別の指導が必要とされるのにも関わらず、教員がどちらかに専念できないことである。現実には、進学目的の学生のニーズを優先するため、交換生のニーズを満たす授業内容を必ずしも提供できず、交換留學生の多くが学部授業に参加することになる。

この矛盾を解決するためには、5～6クラスに交換留學生用のプログラムを開設することが考えられる。日本語力が上級に達した留學生に対してはそのニーズに個別に対応できるようなプログラムが必要となる。具体的には、それぞれの学生が卒論テーマとしている事柄の調査実施の指導、レポート作成指導、発表の指導のほか、現代日本の問題についてのディスカッションなどが考えられる。これらの交換留學生に対しては週5日の講義は必要ではなく、週2～3回の授業形態の方が現実的である。しかし、これは費用対効果、及び学生の多くのニーズのどこに焦点を当てるかが難しい課題となろう。

4-3. クラス分けプレイスメントテストのありかたと改善提案

現在のところ、別科生であろうと交換留學生であろうと、教員が新入生とはじめて出会うのはクラス分けプレイスメントテストの場である。クラス分けの方法は、以前はプレイスメントテストのみであったが、07年度からインタビューも実施するようになり、より正確に各学生のレベルを把握できるようになった。各学期50～80名の新入生のインタビューを行うのだが、専任教員だけでは不可能なため、非常勤講師の方々の協力をお願いしている。半日がかりの神経を使う作業であるが、これらの作業に対しては対価が支払われておらず、ご厚意に甘えている状態である。これを何とか改善していただきたい。

ブレイスメントテストの試験問題についても、数種類準備するよう、改善する必要がある。これも、専任教員のみでは困難な作業であり、今後の重要な課題となる。

4-4. コーディネーター制度のありかたと改善提案…上限コマ数の増加

07年前期までは、専任教員および特任教員が各クラスのコーディネーションを行ってきた。しかし、クラス数の増加などの背景からその負担が極限に達したことから、07年後期から非常勤講師のうち担当授業数が多い数名をコーディネーターとして起用し、1つずつクラスをコーディネートしてもらうことになった。このことにより専任教員および特任教員の負担は確実に軽減された。

しかし、この体制を続けて約3年が経過した現在、いくつかの憂慮が生まれている。第一はコーディネーターの業務の激化である。自分のクラスの運営を円滑に進めるため、強い責任感によって非常に努力する結果、長時間にわたって業務をこなすことになってしまっている。

第二は、チーム内の協力体制の弱体化である。コーディネーターに責任が集中する一方で、そのほかの教員が立場を超えて協力することがだんだんと少なくなっている。

第三はコーディネーターの固定化である。すでに長い方は5学期務めてくださっているが、適当な時期にコーディネーターの交代と担当クラスレベルの交代が実施され、多くの非常勤講師にコーディネーションの機会を与えるよう、改革していく必要がある。

このような問題点については、コーディネーターの方々とも共有し、話し合いをしているが、現在のコマ数（5コマ上限）では、本当に責任が取れる体制には2コマ程度不足しているというご指摘がある。学生たちにとっては、コーディネーターは学習上の問題も個人の悩みも相談できる頼りになる存在である。その先生たちが週に2回しか顔を出さないのでは、対応が遅れがちであり、先生方自身も不安感が大きい。

他学部では上限コマ数が多く、それだけの効果を上げていると考えられることから、競争力を高めるためにも、本学でも体制の改革の必要性がある。

4-5. 別科教員の労働量…専任教員の増員

5クラスしかなかった時代から現在まで、収容する学生数は大幅に増えたにもかかわらず、専任教員および特任教員の定員は増加していない。そのため、上記のコーディネーター制度新設をはじめ、いくつかの改善を行ってなんとかやりくりしてきたが、多くの学生に適切に対応するには、現在の陣容では全体の統括に欠けるところが多い。早急に人員を増やしていただきたいものである。

別科の専任教員はいくつかの資質が必要とされる。日本語教育面での能力はもちろん、研究や対外的活動の能力も必要である。さらに、別科運営の上でのビジョンを持ち、実行していく学校経営上の能力も兼ね備えていることが望ましいと考える。

一方、非常勤講師は24名のほり、大きな戦力となっている。特に、学生数が膨張した学期には、宿題チェック、作文チェック、試験の採点など業務量が増加する。さきに4-3で述べたボランティアな協力もお願いしていることから、なんらかの待遇改善を考えていただきたい。

4-6. 選択必修科目のありかたと改善提案

本項2-4において別科で行われている選択必修科目について述べたが、より学生たちに理解しやすくするため、いくつかの改善提案を行いたい。

ひとつは、科目をカテゴリー別に整理することである。これは05年度末のタスクフォース報告書でもすでに述べたことであるが、歴史的経緯を持つため、科目の性格と分類が混在している。学生がより簡便に履修登録できるよう、次のように変えてはどうか。

①学部からの日本事情科目…「日本の宗教」など

②日本文化科目…現在①に分類されている「日本の武道・芸道」をこちらに移す。

特別講義「[囲碁]」、「[Buddhism]」、「日本文化入門1, 2」

③日本語能力試験対応講座…1, 2, 3級対応の各講座（注：日本語能力試験は2010年7月からはN1～N5の5つのレベルに改組される予定。それに伴い当別科においても改組の予定である。）

選択必修科目はそれぞれ履修要件（クラスレベル）が決められており、特に2クラスの学生たちには履修できる科目が少ない。にもかかわらず、毎学期のように①類の履修を希望する学生がおり、担当の先生方に面接をしていただいている。①を3クラス以上と決め、②、③を2クラスでも履修可能とすることによって①類の担当教員の負担を軽減することができる。

もう一つ、交換留学生在が日本語レベルを問わず熱望していることは、英語での専門科目の増設である。すでに学部においては英語の専門科目が増えつつあるが、別科においては、授業枠が決められているため、増設は折衝が必要である。あまり難しすぎない内容で英語による選択必修科目の提供が望まれる。この点は龍谷大学第5次長期計画の中で全体の統合性を考慮しつつ決定されるべきことではないかと考える。

本稿では留学生別科のあり方を主に述べてきたが、大学全体の問題としては、学部・大学院に在籍する500名以上にのぼる留学生の問題もある。ひとつだけ指摘するとすれば、これらの留学生に対して量的にも質的にも日本語教育を受ける機会を拡充する必要があるということであろう。また、各教員が提供する授業内容のインテグレーションも望まれるところである。

5. 留学生別科の今後の展望

現在、「留学生30万人計画」は全国で13校が指定されて後、進展していない。しかし、龍谷大学においては、この計画とは別個に第5次長期計画に基づいて大学の国際化の方針が立てられていくことと考える。その根本となるのは、まず龍谷大学が、留学生受け入れについて、どのようなビジョンを持っているのか、第二に留学生別科をどのような機関と位置づけ、どのような役割を果たさせようとしているのか、第三に、別科で学ぶ学生に別科生、交換留學生を問わず、どのように質の高い教育を提供し、修了後も絆を保っていくのかという三点から考えていただきたいと熱望している。

留学生別科は今後さらに多くの学生を受け入れ、大学の国際化の一拠点であり続けるであろう

うが、そのためには、上部機関である国際センター、国際部の強力なバックアップの体制を引き続き受ける必要があり、さらに、各学部との連携を強化していく必要がある。第一に、より質の高い日本語教育を提供するために別科自体が絶えざる改革を続けていかねばならない。さらに知恵を絞り、この困難な時代を克服していきたいものである。

参考資料： 龍谷大学第5次長期計画（2009・9発行）
龍谷大学国際センター研究年報（2009年3月発行）
龍谷大学留学ガイド2009-2010